スポーツ教育の新たな展開とその課題
―「古くて新しい根性論」の構築―

平　尾　　剛

「根性論」を俎上に上げずスポーツ教育を論じることは現実離れしている。いうまでもなく「根性論」は否定されるべきものだが、子どもから大人までの各カテゴリーにおけるスポーツ活動にわたっていまだに幅を利かせているのが現状であり、避けて通ることはできない。

「根性論」が非科学的で時代遅れであるとされながらも、現場では静かに、でも根強く支持されているのはなぜか。それは選手や指導者をはじめスポーツ現場に居合わせる人たちが、その効用を実感しているからである。選手も指導者もスタッフも、気持ちの持ちようでパフォーマンスが向上することを肌感覚で知っている。だから、社会の風潮として蔓延する「根性論」からの脱却に、頭では理解しつつもからだがついてこない。「そうはいっても根性は必要だろう」という体感的な解釈から、多くの人が逃れられないでいる。

「根性論」は、いわば経験知としてその命脈を保ち続けており、その根拠が身体的である以上、おそらくこれから先もそれへの信憑が無に帰すことはないだろう。どれほど精密かつ論理的に導かれた結論であっても、それはあくまでも頭での理解を促すものでしかないからだ。正論だけで人の心が動かないのは自明であり、実証主義的に否定したところで現状を変えることは叶わない。

だとすれば私たちがすべきことは、引き続き「根性論」のネガティブな側面を論理的に指摘するとともに、本質を見極める視座から「根性論」と向き合い、この身に感じる効用にも適切な言葉をあてがうこととなる。

「根性論」を本質的に考える上で参考となる論考に、下竹亮志の「根性論の系譜学――六四年東京オリンピックはスポーツ根性論を生んだのか？」がある。ここでは1964年東京オリンピックを契機として今日まで連綿と続く「根性論」の系譜を明らかにしている。

本稿では、この論考をなぞりながら考察を試みる。

一般的に「根性論」の起源は、「東洋の魔女」と呼ばれた日貿貝塚チームを率いて金メダルへと導いた大松博文の指導論だといわれている。また、当時の日本アマチュア・レスリング協会会長である八田一郎が、選手の全身の毛を剃るという罰や上野動物園のライオンとにらみ合うというトレーニング法も挙げられる。

だが、実際はそうではないという。

大松は、ハードトレーニングと「しごき」は似て非なるもので、練習はあくまでも医学に立脚して合理的に行う必要性を指摘し、自身の指導論が歪曲されて世間に広がりつつあることを嘆いている。また八田も、勝敗の結果を体力や技術を抜きにしてすぐ気力や根性に結びつけるのは軽率である旨を主張している。

下竹は、両者ともに根性を手放しで歓迎しておらず、「個人の抑圧、従順の強制、不合理

神戸親和女子大学　発達教育学部　ジュニアスポーツ教育学科　教授

性や非科学性」といった特徴を持つ今日の根性論は見出せないという。

さらに、64年大会に際して設立された東京オリンピック選手強化対策本部のスポーツ科学研究委員会心理部会では、根性を科学的対象として議論しており、その内容を以下のように定義している。

① 計画性、科学性（研究心）、創造性（創意）

② 自主性、規律性、責任感

③ 意志の強さ、敵愾心、勝利に対する意欲（執着、闘志、士気、決断力、勇気、持続性）

ここから下竹は「(…) 当時のスポーツ界での根性論は、単に指導者への服従や、従順であることを強制するような発想を持ち合わせていなかった。むしろ、選手の自主性、能動性、創造性、科学性の尊重、指導者の選手に対する個別性への配慮など、先行研究が想定してきた根性とは真逆の特徴を見いだすことができるのである。同じ考え方は、根性を科学的対象とする研究者の言説だけにとどまらず、現場の指導者にも見て取ることができる。[1]」と結ぶ。

ここまでを踏まえると、私たちが知る「根性論」とは異なるどころか、むしろ正反対の意味すらあったことに驚かざるをえない。

ものごとに対して主体的に取り組むことは言葉でいうほど容易ではない。そこには迷いや戸惑いが生じ、その都度立ち止まってみずからを顧みなければならない。また、長期にわたって意欲を継続させる努力も必要となる。自分で考え、その考えに基づいて行動に移すという「主体性」および「能動性」は、強き心に支えられていなければならず、それを当時のスポーツ界が根性と称していたことは注目に値する。

さらにいえば、当時の根性には「創造性」すら含んでいた。根性と創造性が相容れないものとしての認識が広まった今では想像が及ばないだろうが、よくよく考えてみると合点がゆく。

スポーツには直感的な判断が不可欠であり、トップレベルになるほどこの「創造性」が勝敗を分ける（いわゆる「ひらめき」である）。情況を把握するために周囲を観察し、それぞれの場面に応じてタイミングよくスキルを使わなければハイパフォーマンスは生まれず、試合にも勝てない。技術や体力が必要なのはさることながら、そこでは「精神的ななにか」が作用するのは経験者なら熟知している。この「創造性」が、当時の根性には含まれるのである。

ではこの自主性や創造性を含む、より包括的な概念としての＜根性＞が、いかに今日のような「根性」となったのか。個人の抑圧や従順の強制、不合理性や非科学性を特徴とし、忌避するのが当然であるような根性論がつくられたのはどこなのか。

それは経済界だという。

経済界における「根性論」には科学的根性論と実践的根性論の二つの経路があり、今日私たちがイメージする「根性」に近い意味を見いだせるのは後者だという。その一例として、経営・経理の実務家として実業界で経営教育に携わり、原価計算の第一人者と称されていた中山隆祐の著書『根性の経営学』を挙げる。引用されている文章からは、たくましい精神、部下への無理強い、大声での叱責などの表現がみてとれる。

また、能率的生き方研究会が編集した『イザという時役立つ根性』が、各章の冒頭に戦陣

訓[2]からの引用を付す構成で編まれていることを指摘し、軍国主義的精神の流入経路も明らかにしている。

こうした言説が、経営者やサラリーマン、ビジネスマン、セールスマンと企業人のあいだで実践されていく。戦後の復興や高度経済成長という時代背景が経済界と政治を結びつけ、そのなかで今日的な根性論はかたちづくられたとする下竹は、「政治と経済界が結託して「愛国的な企業戦士」を求めるなか、その人材育成に合致した思想が今日に連なる根性論だったのではないだろうか。[3]」と結論づける。

個人の抑圧、従順の強制、不合理性や非科学性といった特徴を有する今日の「根性論」は、スポーツ界に端を発するものの、その中身は経済界においてつくられた。理不尽への忍耐や絶対的な上下関係などの根性論的な思想体系は、軍国主義的精神を導入した経済界で醸成されたのであり、スポーツ界ではなかったとするこの下竹の指摘は、私たちにパラダイムシフトを突きつけてくる。

たとえば社会問題のひとつであるパワーハラスメントは、経済界において将兵に見立てた企業戦士を鍛えるための根性論がいまだにまかり通っていることの証左だろう。経済が成長を続ける時代に覆い隠されてきたそれが、時代の移り変わりとともに表面化してきたと推論できる。したがって現在のスポーツ界に蔓延る「根性論」は、経済界からいわば逆輸入するかたちで（たとえば企業に勤めている大人が休日を利用して子どもにボランティア指導を行うなどして）広がったと考えられる。

経済界から還流する「根性論」を食い止め、スポーツ教育の充実を図るためには、根性の意味を、従来のスポーツ界が目論んだ主体性、能動性、創造性をも含む重層的な概念に書き換えなければならない。いわば「古くて新しい根性論」なるものが求められる。原点回帰および温故知新の態度で構築していった先に、スポーツ教育の未来がある。

参考文献

石坂友司／松林秀樹編著『一九六四年東京オリンピックは何を生んだのか』（青弓社）2018年

引用・注

1　石坂友司・松林秀樹編著『一九六四年東京オリンピックは何を生んだのか』（青弓社）2018年 p.87

2　1941年に当時の陸軍大臣だった東條英機の名で全陸軍に下された、戦時下における将兵の心得。「生きて虜囚の辱めを受けず」という一節が有名。

3　同上書 p.93